頼山陽先生

吉村保著

373
528

373-528
1200501450389

始

東山翁先生

頭山満先生

373-528

序

明治維新の精神的原動力であり、尊王愛國の先唱者であり、卓落の氣、殊群の筆千古に曠しき我が山陽頼襄先生の逝去せられたのは、天保三年(紀元二四九二年)九月であつて、今秋は恰も先生の一百年忌に丁る。先生の成育地である廣島縣市では、先生の英靈を祀る山陽神社を創建し、先生の詳傳を編纂し、盛大なる祭典を擧げようとの計畫を進めてゐる。又先生は文化八年閏二月、三十二歳を以てこの京都に來住し、五十三歳終焉の年まで二十二年間の久しきに亘つて起臥せられたので、京都は最も緣故の深い地となつてゐる。その在住の年數から觀ても、その事業の功績から考へても、京都は寧ろ廣島に比し貴緣が深いといつてよい。

茲に於て乎、京都府教育會、京都市教育會、京都府教化團體聯合會の三團體は、在京都廣島縣人會の組織せる顯彰會京都支部との聯合主催の下に、今茲十一

月一日をトして先生の百年祭を嚴修し碩學の講演を聽き先生の略傳を頒ち、以て先生の英靈を慰むると共に、その遺德を仰いで廣く世道人心の振作に努むることとなつた。

　而してこの略傳の叙述は、我が國史教育に造詣深き京都市立堀川高等女學校教諭小酒井儀三氏に囑し、主催團體側の荻原忠作氏外四名の編輯委員に於て補修校訂を加へ出版することとなつた次第である。讀者冀くは本書によつて先生の偉大なる風格を偲び、功績を追慕するの資に供されんことを。

　昭和六年十一月一日

編　者

賴山陽先生傳目次

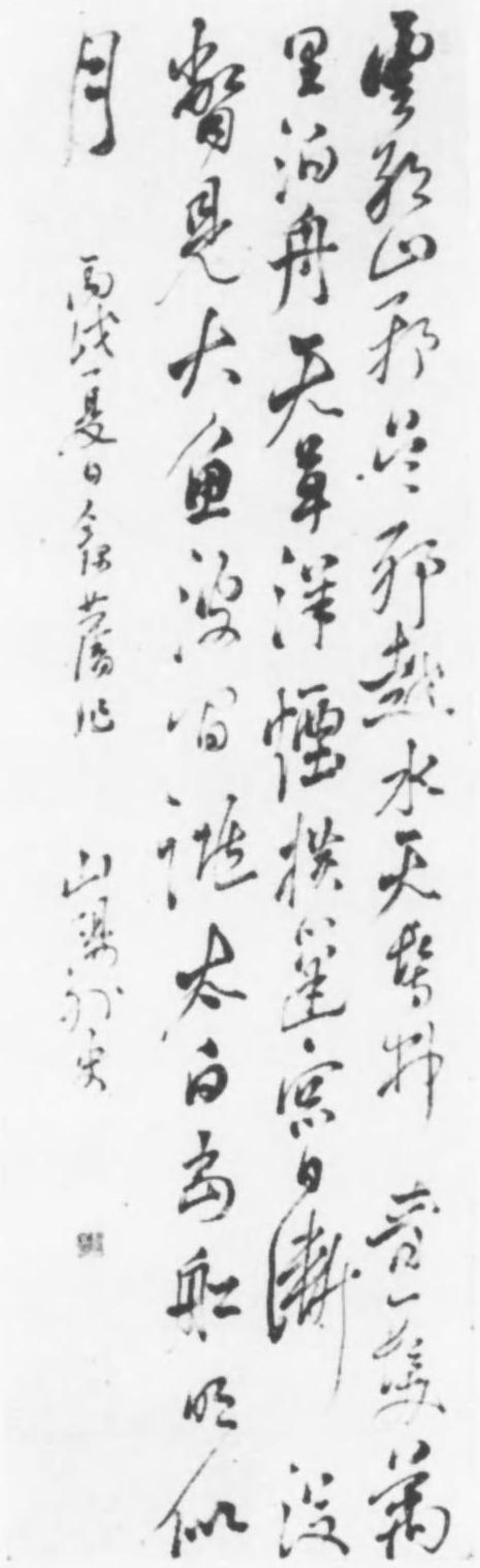
一、賴家の由緒……一
二、先生の父母……三
三、幼年時代……四
四、青年時代……一〇
五、壯年時代……一三
六、晩年の生活……二〇
七、先生の後裔……二五
八、先生の逸話……三六
九、名著……四二
十、餘榮……四六
賴山陽先生年譜……四八-五一
附錄（詩文）……五三-八〇

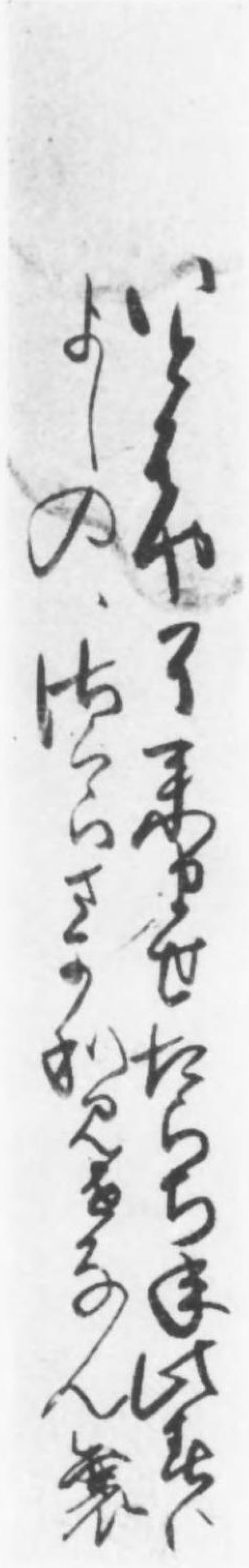
表紙

先生が母への書翰
母堂に贈れる饅頭蒸
表題、川面甲山先生筆

寫眞

先生の肖像（卷頭）
先生の詩歌　同
遺跡山紫水明處（二十三頁）
墓所（三十四頁）


雲耶山耶呉耶越水天髣髴青一髪萬里泊舟天草洋烟横篷窓日漸没瞥見大魚波間跳太白當船明似月
山陽外史



雲耶山耶呉耶越　水天髣髴青一髮
萬里泊舟天草洋　煙横蓬窓日漸沒
瞥見大魚波間跳　太白當船明似月

いとはやす來ませたらちね此春ハ
よしのゝはくらさゐわ見せたふん　襄

賴山陽先生傳

一　賴家の由緒

賴家の始祖

先生の祖は備後國三原の城主小早川隆景の臣惣兵衛正茂から出てゐる。正茂が姓を何といひ、隆景の臣下として如何なる地位にゐたかは、その家譜がはやく燒失して今からそれを知ることができない。隆景が實子なくして慶長二年六月（豐臣秀吉の薨ずる一年二ヶ月前）に歿すると、その諸臣の中では近村に分散して歸農したものもあつたが、正茂も亦東北の賴兼村に退隱して道圓と號し、ついで更に安藝國賀茂郡竹原鄉の下市村（今の竹原町地內）に移住し、この時先住の地名賴兼村の一字をとつて氏を賴と改め、和船を造つて海運業を營み、その餘生を送つた。

祖父享翁の好學

先生が儒者として立ち、詩文の世を驚かすに至つた基根はその祖父又十

郎(號は亨翁)に在る。又十郎は僅に十五歳でその父母を亡ひ、人生の苦辛を嘗めたことは一方でない。父祖の家業を襲うて產を治め、その餘裕を以て栽植を嗜み、旅行を試み、更に和歌を同鄕の道工彥文吉井豐庸に學び、後には京都に上りて馬杉亨安・小澤蘆庵の提撕を受け、伊勢の谷川淡齋の門に就いてその大意を究め、古歌集を讀んで自得したから、その諷詠した『吾妻紀行』『高角紀行』『芳野紀行』などの歌集には、穩健淡雅な作品が少からず散見する。この好文の精神が直にその兒を感化して、春水・春風・杏坪の如き人物を出し、春水の息に先生の如き學者を出したのである。今左に前記の道圓から先生に至るまでの略系を掲げる。

賴氏略系

賴家略系

總兵衞道圓 ── 彌七郎道喜 ＝ 彌右衞門善祐 ＝ 矢原氏・水林氏
- 又十郎亨翁 ＝ 道工仲子
  - 彌太郎春水 ＝ 飯岡靜子(梅颸) ── 久太郎山陽
  - 松三郎春風(惟疆)
  - 萬四郎杏坪(惟柔)

父春水

二　先生の父母

先生の父彌太郎春水(惟完)は又十郎亨翁の長男で、同鄕の鹽谷志帥忠海の平賀中南に就いて經書の讀誦を受け、泉州堺の書家陶趙齋に筆道を學び、何れも長足の進歩を示したが、大阪の碩學片山北海の門に入つて儒學と詩文を受けるに及んで、遂に大成の端を開いた。斯くて二十八歳の時大阪江戶堀北側一丁目に家塾を創めて青山社といひ、子弟を集めて教授することとな

母梅颸

つた。

先生の母飯岡靜子は大阪立賣堀南裏町の醫師飯岡義齋の女で嚴肅と慈愛の間に育成された淑女であつたが、その十九歳の時、大阪の鴻儒中井竹山の媒妁で、安永八年十一月、三十四歳の春水に嫁し、琴瑟相和し、京阪の文林相傳へて才子佳人の相遇と稱した。

三　先生の幼年時代

先生の誕生

光格天皇の安永九年(庚子)十二月二十七日、大阪江戸堀北通一丁目濱側(江戸橋の少し西)の春水の家に呱々の聲が揚つた。これぞ我が山陽賴襄先生であつたのでこの聲こそ他日日東帝國を警醒し、人心を振作する大獅子吼となつたのである。祖父又十郎亨翁の意を承けて久太郎と名づけられた。

廣島と先生

翌天明元年十二月、春水が藝州廣島藩主淺野重晟の命によりて、廣島藩學の教授となり、この月中旬單身任地に赴いたから、先生は暫く父の膝下を離れたが、天明二年六月母に伴はれて、廣島西研屋町の借宅に入り、爾後八年間この家に起居生育することとなつた。

春水は藩侯の信任益々渥く、天明三年七月世子善次郎(のちの齊賢)の侍讀として江戸詰を命ぜられたから、先生はまた母に隨つて大阪に往き、外祖父飯岡義齋の家に寄寓し、一年の後父の歸藩と共に、再び廣島に歸り、西研屋町の家におちついた。

天を不思議がる

天明五年六歳の時、一日庭上で青空を仰ぎ、頻に思考する樣子であつたが、俄に母に向つて「天とはどんなものか」と尋ねた。母は「天はあの通り絶えず運轉して、日夜寸時も休まないものである」と懇に教へた。先生再び庭に出て蒼天を望みながら「不思議ぢや不思議ぢや」といひ、何故か半時ばかり泣かれたといふ。

穎悟

天明六年三月、父春水が江戸から歸ると聞き、下女と共に毎夕郊外の松原口まで出迎へに行つたが、父の姿は見えず、唯麥を負ふ農夫ばかりを見たか

ら、家に歸つて紙を展べ「家君不㆑歸唯麥歸」と書きて母に示した。さすが賢明な母も驚いて、將來の大成を私に期待したとのことである。

入學と金子樂山

天明八年正月先生九歳で始めて廣島藩の學問所に入學し、金子樂山から經書を授けられた。この樂山は山崎闇齋の學統を承けた人であつたから、先生が他年尊皇の大義を高調し、時世を警醒されるに至つたのは、一は先生の天資の然らしめる所であらうが、他に樂山の感化も與つて力あつたに相違ない。

山崎闇齋―植田艮齋―加藤十千―金子樂山

軍記物の耽讀

併し論語・孟子の句讀を日々復習することは、幼年の先生には忽ち倦怠の念を起さしめ、國字本に趣くの傾向となり、殊に父から送られた保元物語・平治物語及び義貞記に至つては、喜躍して耽讀したので、後年日本外史を撰して、先づ初に平源兩氏を叙し、政權の武門に移つたことを慨き、ついで楠木新田等勤王の士の事蹟を說いて、北條足利の悪逆を筆誅するに至つた萠芽は、既にこの時に胚胎したと思はれる。

先生の持病

されど日夜讀書に過ぎた結果は、いつしかその健康を害し、殊に胃を損じて水を吐き、疳癖甚だしく氣むづかしい兒童となつた。母頗るこれを憂ひて讀書を禁じたが、先生は母の眠に就くを覗ひ竊に行燈に衣を蔽うて稗史野乘の類を繙いた。

立志論を作る

寛政二年八月先生十一歳の時、春水は藩主から廣島國泰寺裏門前杉木小路（今の廣島市袋町二百三十番屋敷頼彌次郎氏宅）の邸宅を賜はつたので、妻子を伴うてこゝに轉住し、翌三年三月父によつて諱を襄といひ、四月には易經を卒業したので專ら力を文章に用ゐんと志し、立志論と題して一篇の文を作つた。

立志論

男子不㆑學則已、學則當㆑超㆑群矣、今日之天下、猶㆓古昔之天下㆒也、今日之民、猶㆓古昔之民㆒也、天下與㆑民古不㆑異㆑今、而所㆓以治㆒㆑之、今不㆑及㆑古者何也、國異㆑勢乎、人異㆑情乎、無㆓有㆑志之人㆒也、庸俗之人溺㆓於情勢㆒而不㆓

先生の大志

自知、無上下一也、此不足深議焉、獨吾黨非傳夫古帝王治天下民之術者乎、而徒拘然呫嗶是申、尋章摘句以爲一生大業、亦已陋矣、是其業雖貴與庸俗何擇、乃將爲庸俗所侮、噫男子不學則已、學當超群矣、古之賢聖豪傑如伊傳如周召者亦一男兒耳。吾雖生于東海千載之下、生幸爲男兒矣、又爲儒生矣、安可不奮發立志以答國恩以顯父母哉、遇不遇天也、苟學古帝王之道有得乎、神明之、在我所爲、我所爲合今日情勢、而其至也、情勢隨我而同、夫然後古聖賢豪傑所成、吾亦可幾已。孰謂吾言之狂乎。吾生十有二年矣、以父母教得聞古道者六年矣。春秋雖富其成已近、苟不自奮因循消日、則將伍夫尋章摘句之徒而止、可不恥哉。於是書以自力。又申之曰、噫女擇之、同立天下、同爲此民、女群庸俗乎、抑群古賢聖豪傑乎。

と、實用の學に重きを置いたことが、明に察せられる。この覺悟と決心を以て奮勵一番夜を以て日に繼ぎ、古今の史籍・制度・兵法及び家譜の類を渉獵し、

處女作の詩

常に書冊の間に「汝草木と同じく朽ちんと欲するか」と書した警策を挾み、倦怠の念起る每にその策を叩きながら、この語を高唱して自ら戒めた。菅公は十一歲でかの「月耀梅花」の詩を作つて世を驚かしたが、先生も亦十二歲でこの立志論を屬す。後年先生人に語つて「予を才子といふものは、未だ予を知つたものではない。予を刻苦勉强の人といふものあらば、眞に予を知つたものである」といつたといふが、この天稟を有した上に絕倫の勉强を以てしたのであるから、いはゆる鬼に鐵棒で、文章經國の偉人となつたことは、決して偶然ではない。況んや寬政四年十三歲で「十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生死、安得類古人、千歲列青史」といふ詩を作つて、柴野栗山博士に舌を卷かせたのであるから、竹馬嬉戲を事とする凡庸兒でなかつたことはいふまでもない。この頃から栗山の勸めにより『通鑑綱目』を讀み始め、漢土の歷史に通ぜんと志した。後年日本外史・日本政記などの史書を述作するに當つて、通鑑綱目から得た所が多いと思はれる。

四　青年時代

支那の史籍文章に親む

「寛政六年先生十五歳に達し、學既にその好む所に趨き、『小學』や『近思錄』の如きには興味を感ぜず、家藏の書函を開いて群書をあさり、殊に『蘇長公論策』を讀むに及んで大に喜び、力を文章に用ゐ、また眼を史書に注ぐことも多いやうになつた。」

持病を發す

昨年から春水は國元に歸つてゐたから、先生は嚴父慈母の膝下に樂しく勉學を續けてゐたが、寛政八年元服の禮を擧げて後、六月中旬に至つてまた持病を發した。母梅颸の日記によると「疳強く、無言にして氣重く、狂氣のやうなる事、物事に疑深し」といふのがその容態であつた。

昌平校に入る

「同九年正月廣島藩の學問所に寄宿することとなり、他日昌平校に學ぶ素地を作り、同三月叔父杏坪(世子齊賢の侍讀)に伴はれて江戸に赴き」母の妹飯岡直子の婿尾藤二洲の宅が昌平坂學問所(今の官立大學に當る)の構内に在つたから、その家に寄寓して勉學した。昌平校は天下の秀才を集めた學校であつたが、天授の神才と無比の勉強とは、忽ち同學の傑物と目され、一日諸友からその詞才を試みられた時、

線香一本の間に三十人賛

線香一炷の間に、漢土の武將三十人(太公望・孫武・吳起・白起・廉頗・孫臏等)の賛を作り、諸友の舌を卷かせ、同窓は「日本の賈誼」と讃へ、博士達は「蘇東坡の再來」と評した。然るに江戸城池の堅牢雄大なるを見、上野・芝の德川氏の廟宇の輪奐を望んでは、尊皇慷慨の情に燃えた先生の、到底堪へ得る所でなく、

江戸を去る

「江戸は穢土である。潔士の久しく身を置く處ではない」といつて、同十年夏卒然として廣島に歸つた。これには先生の病氣も加はつてゐたことと思はれる。

結婚

この年十二月賴家出入の奧山龍藏が媒妁となり、同藩士御園道秀の嫡女淳との間に婚約成り、翌十一年二月二十三日先生二十歳・淳子十六歳でめでたく華燭の典を擧げた。

「翌十二年春水は江戸詰となり、秋九月には昌平校の教官となつたから、かの寛政の三博士といはれた柴野栗山・古賀精里・尾藤二洲と同僚交友となり、

京都に上る

押しも押されもせぬ天下の大儒と仰がれたが、先生は恰もこの頃京都に上り、福井新九郎の家に寄食し、やがてまた廣島に歸つた。

日本外史起稿

夫人淳子はその後示談の上離別せられ、享和元年一月長男餘一（のち聿庵と號す）を生んだ。先生はこの頃から『日本外史』の初稿に着手した。越えて享和三年春水は廣島に歸り、一家に和風吹き亘つたが、先生は過度の勉強のため、文化元年六月烈しい眼病に罹り、讀書執筆意に任せず、ために癇癖嵩じて兩親を困らせた。春水の苦心と築山氏の斡旋とにより、文化二年五月先生は二十六歳で藩の助教となり、父の代講に立身した。

父の代講となる　古文典刑の著作　新策を著はす

同三年『古文典刑』を著はして、支那古書中の文章の精粹を拔いて、世を益した。同四年には我が國の制度・政治・財利・實業・訟獄等の沿革論評を編して『新策』二十三論を公にし、史學・政治・經濟に關するその天分を發揮した。一張一弛一榮一枯は世の常ではあるが、先生は過度の勉強の次には必ず持病が再發する例で、同六年正月頃から先生の病氣また起り母はその慰藉にほと〳〵手を燒いた。されば その梅颸日記を見ると、「久（先生のこと）權（熊吉のち權次郎と改めた。先生の從弟で賴家の嗣子）歸遲く、いましめる」。「癇生夜出る樣子也」などと度々出てゐる。

菅茶山の塾に入る

この事を聞いた備後神邊（福山の東北驛）の詩宗菅茶山が、先生を生徒監督に迎へたいと申込んだので、その十二月末つ方父の同意と藩主の許可を得て、茶山の黄葉夕陽村舍に入り、その廉塾の塾頭となつた。

五　壯年時代

茶山の塾を出て京都に上る

文化七年春先生は三十一歳となつた。されば以後をその壯年時代として傳する。茶山は先生の才能を見て、格別の愛眷を加へ、遂にはその姪女を娶はせ、福山侯に仕へしめようと勸めるに至つたが、先生はもと京都に出て天下の學者たらうと望み、その階梯として神邊に出たのであるから、他藩への仕官などは思ひも寄らず、こゝに廉塾を見限るべき時機と考へ、文化八年閏二月八日「水凡山俗、先生頑弟子愚」と壁書し、忽然として黄葉夕陽村舍からその

姿を消して、福山の伊澤蘭軒、備中の小野櫟翁などの家に一二泊しつゝ、播、攝兩國を過ぎて大阪に入り、儒者中井竹山、履軒兄弟の宅を訪うたが、皆先生を以て不孝者と做し、冷遇薄待せられて大に憤慨した。

名聲大阪に聞こゆ

されば多少の自棄心も手傳つたものにや、新町のあたりに流連し、旅費を消盡してなほ不足を告げたので、樓主から嚴しく督促せられ、果は罵詈嘲笑を加へらるるに至つた。先生乃ち妓に命じて紙を展べしめ、立ろに十枚の書を揮ひ、これに書狀を添へて雲華和尚の許に送らせた。時に和尚は本願寺の大阪別院で門徒を集めて法を說いてゐたが、先生の書狀を披見すると、直に金三十兩を出して使の者に渡した。こゝに樓主等は始めて客の賴先生であることを知り、その名聲大阪市中に響き亘つた。

京都に私塾を開く

かくて數日の後京都に上り、大阪の詩人で父の友人なる篠崎小竹から、京都の蘭醫小石元瑞に紹介され、その斡旋によつて新町通丸太町北入る處に家居を定め、儒學授業の私塾を開き、始めて積年の宿志たる京都在住を果すこととなつた。併し千年の帝都學者の淵叢である京師に、さしたる援引者もなく、卒然として帷を下したとて、數多の門人を得る筈はなく、先生の囊中常に空乏を告げたのも無理はない。されどその意氣はあくまで昂然たるもので「京師の儒は村瀨栲亭の外語るに足るものなし」と豪語してゐた。

美濃伊勢方面に遊ぶ

知友增す

文化十年四月父春水は孫餘一を伴うて上京したので、先生はそれを大阪に出迎へ、四年ぶりに父子對面して、相携へて京に入り門人と共に歡待したのである。この年九月美濃に遊び、蘭醫江馬蘭齋を大垣に訪ひ、その二女多保子(今年二十七歲、細香と號し、詩畫に巧であつた)を見て、その才學を愛し、その畫に贊したりなどして、親交した。翌十一年多少の餘裕を得たので、五年ぶりで廣島に歸省し、先づ竹原に叔父春風を訪ひ、ついで廣島杉木小路の家に兩親を省し、舊師親戚知友の間を往來し、滯留二週間九月十一日膝下を辭して東に向つた。途次備後尾道の人熊谷士晋の挹翠園を觀、女流畫家平田玉蘊と相識り、神邊で江戸の碩學市河寬齋と邂逅して文酒の交を結び、鞆津で三島

怡齋に招かれて對潮樓に遊ぶ間、偶然豊後の學者田能村竹田と逢ひ、肝膽相照らして莫逆を誓ひ、岡山で姫井桃源を訪ね、道を枉げて閑谷黌を觀、その諸教授と會談し、大阪に篠崎小竹を音問し、諸名士と詩酒の交を盡して悠々京都に歸つた。

日本外史を隱匿す

文化十二年正月賴家の嗣子熊吉(元鼎と號す)俄に病歿したので、先生の長男餘一が孫を以て直に祖父春水の相續人となつたが會々父重病との報に接して遽に歸省し、その回復を待つて東上した。この時先生の日本外史は江戸幕府の施政を非難し、治安を妨害するものであるから、遠からず幕吏に沒收せられるであらうとの風評が立つたので、廣島の家に在つたその稿本を嚴島に運び、大聖院の寶庫に密藏したといふ。(後年その風說は全く消え去つたので、先生はその稿本を京都に回收し、篠崎小竹から借り得た『讀史餘論』や『大日本史贊藪』を參酌して、かの日本外史論贊を作つたといふ。)

車屋町に轉居

この頃先生は居を新町通から車屋町通御池北入る西側に移してゐたが、その名聲の都下に喧傳するや門人益々加はり題跋の謝禮や揮毫料も亦增したので、その生活はやゝ安樂を感じた。

梨枝女と結婚す

程なく小石元瑞の媒妁により、その養女と結婚の式を擧げた。夫人名は梨枝、江州仁正寺の生れ、後年良妻賢母の譽も高い梨影女史で、時に夫君三十六歲新婦正に十九歲であつた。

父春水の死と精進

この年兩替町通押小路北入る東側に居を轉じ、明くれば文化十三年二月十八日、先生門弟を集めて『莊子』を講じ、逍遙遊の玄義を說いて高潮に達した時、廣島から急飛脚が來て、父の危篤を報じた。先生卷を投じて行李匆々、晝夜兼行電馳して二十四日の早朝廣島の家に着いたが、春水は既に十九日を以て世を去り、比治山安養院墓地に葬られた後であつた。先生切齒して悔恨し、流涕して既往の不孝を謝し專ら母を慰めるに力め、三月二十二日京都をさして東上し、爾來夫妻室を異にし、魚肉を遠ざけて喪に服し、常に祭祀に意を用ゐ、三年の間亡父への孝養に精進した。

文政元年二月十九日は亡父春水の三年忌であるから、その正月下旬に淀

川を下り、大阪から陸路を經て、二月五日廣島に着き、十九日大祥忌を營み、二十一日安養寺に展墓し、祭祀の事全く了つたので、これからかの九州大旅行を試みた。

九州大巡行

三月五日門人後藤松陰を從へて旅程に就き、周防の大道で上田鳳陽の家に宿り、下關で廣江殿峰を訪ひ、壇浦に平家一門の寂滅を弔し、豐前に渡り、大里・小倉を過ぎて筑前に入り、箱崎八幡宮に詣で、博多では松永花遁の家を根城とし、優遊自適、或は名勝を探り、或は文雅の友を訪ひ、書を品し畫を評し、詩文を作り、書畫を作つて初夏の日を過ごした。即ち福岡市外西新町の龜井昭陽(南溟の息)・吉塚崇福寺の月海を始め地方知名の士と交遊した。五月中旬太宰府に菅公廟を拜し、佐賀で中村嘉田・草場佩川・井内南涯・原田鶴樓等と往來し、武雄・大村を經て長崎に入つた。乃ち居を武元登々庵の舊寓にトし、日夜文人墨客と會して風流韻事を談じ、時には海外の事情をも聽取つて大に得る所があつた。中秋二十六日長崎を去り千々岩を經て海路熊本に向ひ、途次天草島に過り、島原の戰跡を訪うた。熊本では辛島鹽井・近藤淡泉・澤村西陂・村井蕉雪・石井藍川等と往來し、月餘で南に去り、水股(水俣)の鄉士德富太藏の家に泊し、その分家德富鶴眠(今の蘇峯氏の祖父)と語り、磯部・野間原・米之津・津奈木・阿久根・川内を過ぎて鹿兒島城下に入り、前後兵兒謠を作つた。

前兵兒謠

衣至骭、袖至腕、腰間秋水鐵可斷、人觸斬人、馬觸斬馬、十八結交健兒社、北客能來何以酬、彈丸硝藥是膳羞、客若不屬饜好以寶刀加渠頭

後兵兒謠

蕉衫如雪不愛塵、長袖緩帶學都人、怪來健兒語言好、一操南音官長嗔、蜂黃落、蝶粉褪、倡優巧、鐵劍鈍、以馬換妾髀生肉、眉斧解剖壯士腹

こゝでは鮫島白鶴・伊地知季幹・肥後芸谷・星山千太郎・五代五峰等と親交し

た。かくて加治木・横川・大口・山野・鶴坂を行吟して再び肥後に入り、東肥街道の長亭短驛を行き盡して豊後に至り、岡城下に田能村竹田・日田の名儒廣瀬淡窓等と交り、十一月中旬こゝから舟筏をやとうて筑後川を下り、久留米藩校明善堂教頭樺島石梁を訪ひ、更に舟行隈町に至り、十二月初旬豊前に入り、山國川の溪谷十五里を過ぎた。山水秀麗天下無二の絶景を賞し『耶馬溪山水長巻』を作り、耶馬溪を世上に紹介し、文人墨客の往観するもの踵を接するに至つた。

母を奉じて上洛

かくて中津町に田中信平を訪ね、直に大里を經て下關に着し、廣江殿峰の梅月樓に文政二年の春を迎へ、海路歸途に就き、二月初旬廣島の家に過り、母を奉じて竹原・尾道の間を舟行し、こゝから中國街道を東上して、三月七日大阪に着き、旅館泉屋に入つた。

余到レ藝留數旬將レ歸ニ京寓一
遂奉レ母偕行、作ニ侍輿歌一

輿行吾亦行、輿止吾亦止、輿中道上語不レ輟、歴指某山與ニ某水一、有レ時偕理ニ襪結解一、母呼レ兒前兒曰レ唯、山陽一路十往還、省レ郷毎計瞬息裡、二毛侍レ輿敢言レ勞、山驛水亭皆鄕里、於レ兒熟路母生路、雙眸常矚母所レ視。

母に侍しての遊覽

母を大阪に留めて己は三月十日に京都に歸着し、その十九日母をその寓居に迎へた。これから兩親に對する報恩を母氏のみに捧げ、侍遊三ヶ月孝養の限を盡した。今左にその歴遊地を掲げる。

東寺花供養・壬生寺狂言・島原太夫道中・三文字屋豪遊。祇園二軒茶屋。嵐山雪の茶屋滯泊二夜。北野。初瀨。多武峰・上市。吉野さこや(今の芳山館)。新庄。當麻寺・法隆寺・龍田・十三峠。大阪天王寺・道頓堀。芝居見物・上京。本願寺・因幡藥師・藪下・歸寓。南禪寺・聖護院。淸水寺。永觀堂・眞如堂・吉田。御所拜觀。(京都在住の人々でも、かやうに悠々市中の見物をしたものが幾人あらうか。)白川越・唐崎・三井寺・石山寺。柳屋滯在螢狩。石山寺參詣。黃檗山・宇治菊屋泊。與聖寺・觀流亭・伏見鮒庄、こゝに

て母は廣島をさして歸途に就いた。

先生の雅友

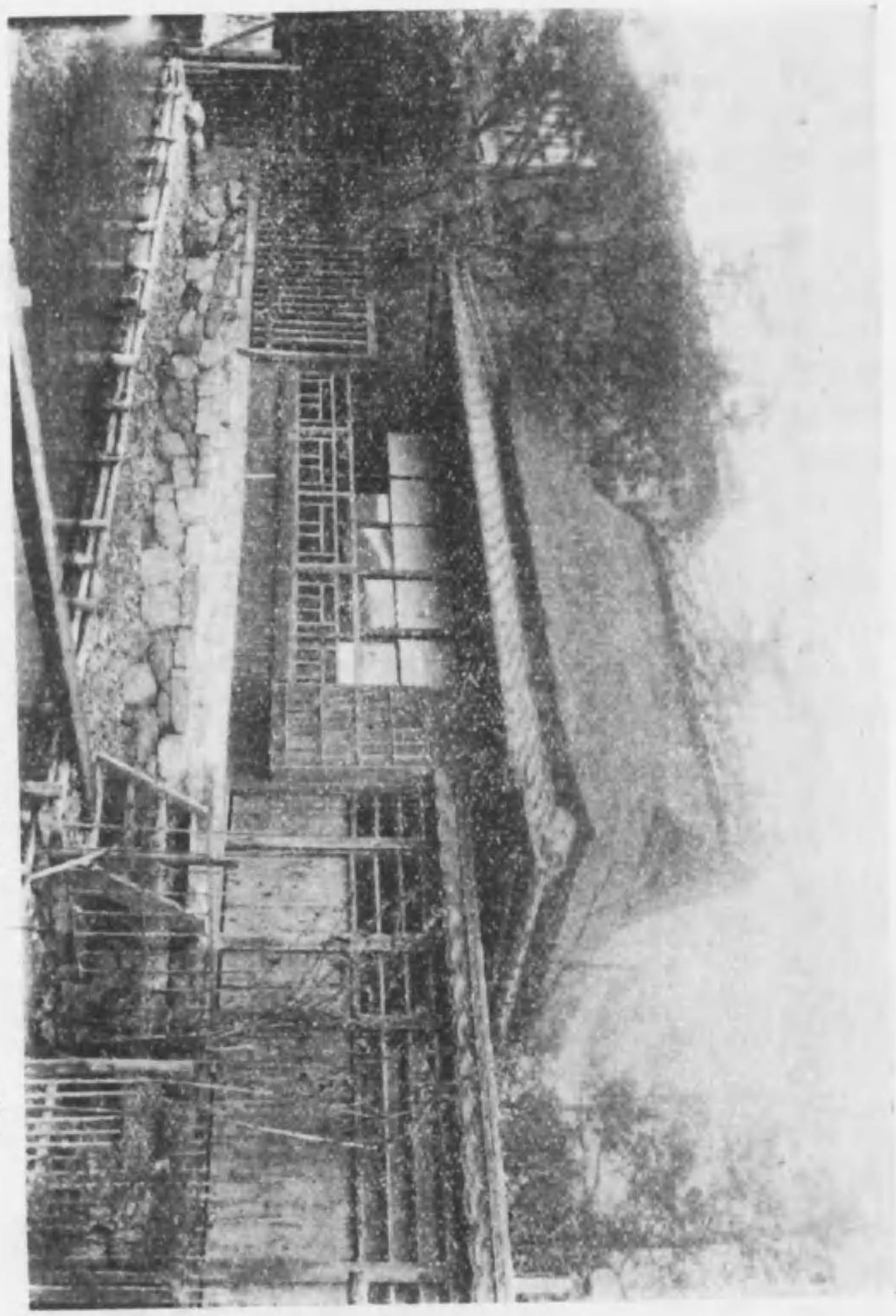
先生の境遇漸く順調となり、母堂への侍遊も終つたから、この後は書を讀み史料を探り、倦めば名勝舊蹟に遊び、親友と往來して作詩を爭ふなど、先生の最も樂しい時期であつた。この間先生の雅友としては、東山雙林寺の月峰上人(菊潤ともいふ。畫家)浦上春琴(同上)熊谷直恭(鳩居堂主人)木米(陶工篆刻の名手)田能村竹田(畫家)雲華大含(本願寺の僧)香川景樹(歌人)等で、江戸の碩學太田錦城・佐藤一齋南部伯民の如きも、入洛すれば必ず山陽先生を訪ふのであつて、その名聲天下に聞こえた。

水西莊の由來

文政二年春居を木屋町に遷し、中に薔薇園を造つて園藝の趣味をも表はしたが、文政五年(先生四十三歳)の十一月邸宅を東三本木に買得してそこに徙り、鴨川の西涯に臨むを以て、水西莊と名づけた。風光水色檻外に浮動し、風

山紫水明處

景絶だ佳く、庭中に一小草堂を築き、山紫水明處と稱した。山紫は唐の王勃が藤王閣の序に「煙光凝而暮山紫」といふ句に本づき、水明は杜甫の詩に「殘夜水



遺跡「山紫水明處」

明樓」といふ疊句から採つたもので、先生は暮山紫の時を以て晩酌を催し、殘夜水明の期を以て讀書に充てたといふ。（前頁寫眞參照）。

その書齋は二疊半の小室で、丸窓・明障子を建て、床は壁に打附けた粗末なものである。庭はやゝ廣く、先生手栽の桐があり、それから竹緣傳ひに山紫水明處に到る。四疊半と二疊板間の二室から成り、天井は葭張り、これに床・違棚あり、楣間には「山紫水明處、是山陽翁舊宅、書了懷二昔游一、爲レ之愴然、時安政四年丁巳復復月望、七十三叟海仙」と記した額を掲げ、小襖にも海仙の畫がある。（海仙の姓は小田井、先生と親しい書畫家であつた）唐樣の欄干の下は鴨川の清流で、遠く東山三十六峰の翠綠に對し、閑雅清洒の處である。この水西莊には先生親らその圖を描いた外、田能村竹田もこれを寫し、菅井梅關も亦これを畫いた。また菅茶山・頼杏坪・諸葛中如・梁川星巖等は詩を賦し、大槻磐溪・中村確堂らは文を屬してゐる。

八大家文の評點

文政六年夏先生四十四歳で「唐宋八大家文」の評點を完了した。翌七年春母堂の上洛を大阪に迎へ、共に淀川を溯り、代見から輿を雇うて三本木の家に達し、再び奉母侍遊を始めた。卽ち三月十六日嵐山・三軒家泊。十八日知恩院觀花。十九日北野・平野觀櫻。二十一日知恩院再訪。二十九日小田井海仙來訪、四月三日三條生洲柏葉亭。四日家族を伴うて高瀨舟に乘り伏見に遊び、更に三十石船で淀川を下り、五日大阪道頓堀着。六日角座芝居。七日木津川口舟遊。市中見物。八日諸家訪問名物試食。十日伏見稻荷祭。十三日賀茂御蔭祭見物。十五日清輝樓に悠遊。十六日葵祭見物。十九日砂川歷遊。二十二日唐崎・石山瀨田。二十三日石山・膳所・粟田。二十八日香川景樹を往訪。五月六日東山長喜庵に子規を聞く。十一日宇治見物。十二日伏見舟遊。十八日瀧原宗閑方歌會に出席。十九日圓山橋の寮。二十四日吉田山神恩院に杜鵑を聞く。六月十五日寺川茂司馬の招待で鴨の河原遊。十八日祇園練物見物。四條河原納涼。二十日因幡藥師堂境内の芝居見物。二十三日舟によつて大阪に向ひ、難波橋の花火見物。二十五日門人の招待で山崎鼻の天神祭を見る。二十六日篠崎小竹の誘引で舟遊。二十

母への侍遊

七日夕網打舟。二十八日小竹の宅で琴三絃の會。八日糺森納涼。十日二條河原納涼。十一日また糺森。十五日御所精靈祭御燈籠拜見。十六日木屋町凉臺で大文字送火見物。十九日水西莊で歌會開催。二十二日寺川茂司馬の案内で糺森に納涼。二十五日錦天神參拜。二十八日島原燈籠見物。八月二日浦上春琴の宅で饗應さる。六日また糺行。十七日信樂の茶屋で觀月。十八日香川景樹招待。十九日高臺寺に萩見・眞葛原に月見。二十四日大佛の萩見。二十七日四條芝居見物。二十九日高臺寺參拜。閏八月十五日小石檉園に招かれて觀月。十六日夜、香川景樹來訪快談。二十一日信樂で松茸狩。二十九日高瀬舟に乗り九月一日朝大阪着・大西の觀劇。二日中の芝居見物。三日齋藤家の饗應で住吉遊覽。四日奥村家の饗應を受く。五日舟遊・大鹽中齋(平八郎)に招かる。十六日眞如堂の觀楓。二十八日高雄の紅葉見。十九日槇尾栂尾巡遊。二十二日嵐山見物・太秦で酒宴。二十四日通天橋。二十五日長樂寺、二十八日瀧原宗閑方で梅颸送別歌會。二十九日永觀堂の觀楓・南禪寺奥丹波屋で食事。十月五日柏悳酒宴、六日知友を招き

孝子山陽

母との留別宴を張る。十月七日母を送つて郷國に向ひ、十八日竹原着・四泊・墓參、二十四日廣島安着。母上洛以來こゝに至るまで九ヶ月、その間奉養侍遊至らぬ所なく、家事を抛擲して雅會遊覽に力めたのである。實に「孝子山陽」の名あるは決して偶然でない。

頼三木八の出生

文政八年先生四十六歳、三月頃『日本政記』の起稿を企てた。五月二十六日四男三木八(後の三樹三郎・鴨涯と號す)誕生、六日垂の翌日日野資愛から八。文。字といふ酒を贈られ、三本木で、文政八年に生れたから、三木八と命名したとの事である。この時の手紙の末に「京の太皷持(幇間のこと)八字をよく付居候故如何と申候へども、それにまぎれる氣遣は無之事。太皷持にさへならねばよろしく、又京には儒にて太皷持同様の人多く候、名ばかり似候て、實似ねばよろしくと申候事に候」と認めてゐる。さすがに自信あり、他の腐儒を諷刺してゐる所痛快といふべきである。

母叔父への侍遊

文政十年三月二日先生は母と叔父杏坪との上京を大阪に迎へ、篠崎小竹

吉野巡覽

の招待で共に舟遊を試み、三日も住吉に遊び、五日水西莊に歸着、六日三本木の清輝樓に開宴、八日長樂寺の彼岸櫻を見、十日母は聖護院森に奉納能を觀、先生は杏坪と共に東洞院錦小路の醫竹中文輔（南峰と號す）に招かる。十三日賀茂の馬場の花見、十五日大擧嵐山觀櫻、十七日吉野行準備、十八日母と杏坪を奉じ、賴立齋・宮原節庵・大堀正輔・大倉笠山・江馬細香・川部岱らを隨へて吉野に向ふ。二十日着、さこや泊、この時の詩に「輿に侍し坂を下るに歩遲々たり。鶯語花香別離を帶ぶ。母は已に七旬兒は半白。この山重ねて到るは定めて何れの時か」とある。更に今樣を詠じたが、それは人口に膾炙するもの

花よりあくるみよし野の　春の曙見わたせば
もろこし人も高麗人も　大和心になりぬべし

叔父杏坪も亦詩歌をよんだが、中にも「萬人醉を買うて芳叢を攪す。感慨誰かよく我と同じき。恨殺す殘紅飛んで北に向ふ。延元陵上落花の風」といふのは、叔甥同じ尊皇の念に篤いを知らしめるものである。母も亦塔尾陵を拜して

よし野山深き恨や埋むらん大御陵の花の白雲

と詠んでゐる。

二十二日芳山を去り、多武峯を經て初瀨に詣で、二十三日奈良遊覽。二十四日宇治菊屋泊。二十六日知恩院の花見。二十七日大槻磐溪を迎へて水西莊に開宴。二十八日平野の花見。二十九日再び知恩院の觀櫻。三十日賀茂に遊ぶ。かくてその費用も相當多額に上つたと見え、書翰の一節に「家萱大勢引連逗留、坂の舊知老婆なども參り居、日々花の手に間に合せ候樣に奔走、嵐山は三日居續千里一花借切、それより芳山へ通駕籠にて參り候など、賴子成（先生の字）が一代の勞費心配御察可レ被レ下候云々」と書き送つてゐる。

四月十一日石山・三井寺巡拜。十三日賀茂御蔭祭見物。十八日三條橋詰の柏葉亭晩餐會。十九日東寺の寺士田邊玄々山人に招かれ、三條みなとやに會飮。二十四日銀閣寺・安樂寺遊覽。二十九日高雄。五月一日嵐山。三日清輝樓に留別

日本外史を献ず

宴を開く。五日上賀茂競馬見物。七日砂川、五月八日母叔父を送つて京都を立ち、九日大阪を經て有馬に着、十一日有馬で別を告けて京に歸つた。

五月中旬白河樂翁侯松平定信の特使が來て、先生著作の『日本外史』を懇望したので、その二十一日遂にそれを献じた。九月下旬返禮として定信から『集古十種』と白銀二十枚を贈られた。文政十年は先生に取つて多忙の年であつたが、八月十三日に茶山を亡つた外は多幸多福最も活動した一年であつた。

六　晩年の生活

文政十一年先生四十九歳の冬十月『日本樂府』完成した。この頃先生は門人を教へ文人墨客と交遊する外、主として『日本政記』に筆を執つたが、傍らこの書を作つた。本書上は聖君から下庶民に至る古今君臣の正邪世道の隆替など、巨細ほゞ備はつたもので、すべて六十六篇から成り、國史を學ぶ者の必讀書である。

また母に侍して遊ぶ

文政十二年二月先生は廣島に歸省して、父春水の十三回忌を營み、三月七日また母を奉じて東に向ひ、十八日早天淀に上陸、嵐山・御室・平野・知恩院に櫻花を觀賞し、二十五日母及び妻子門人(宮原節庵)と共に伊勢に向ひ、二十八日二見に着し、角屋(朝日館)に投宿、二十九日早朝日の出を拜し、内宮參拜、四月一日外宮參拜、四日笠置に歸來、五日舟行淀に到り、夜歸洛、十八日以後砂川・御蔭祭・宇治・大阪・住吉・堺・濱寺などに遊び、五月江州石山・瀬田川筋を往來し、六月祇園・糺森・大阪天滿祭見物、舟遊、八月十四日大津に往き舟を湖上に浮べて觀月、十五日また同じ、二十六日高臺寺萩見、二十七日香川景樹の觀鵞亭訪問、九月二日四條茶店に晩餐、九日菊酒、十二日牧百峰に招かれ、二十九日今村退翁の招待で三條生洲の柏惣に行く。十月九日雲華に招かれて砂川に赴く。かくて母は京都に滯在すること八ヶ月、二十四日午後京を出で、先生は母を送りて、伏見・大阪・伊丹・箕面を經て、中國街道から廣島に届け、十一月五日廣島を發し、

竹原で展墓をなし、こゝから船で東に向ひ、その下旬着京した。

天保元年

文政十三年卽ち天保元年には先生五十一歳、この年六月中旬母の病氣を見舞ふため、廣島に下つたが、母は輕症で、反つて先生は風邪にかゝり、七月中静養、八月六日水西莊に歸着した。

最後の歸省

天保二年九月歸省を思立ち、十月二日廣島に着き、母に紬羽織を呈し、聿庵、その妻皐、三千三・東三郎(七、先生の後裔參照)等に土産物を贈つて快談し、その十五日母を奉じて嚴島に遊び、十一月三日廣島を發して東上したが、これが先生の母との永訣であらうとは誰人も知らなかつた。

終焉

天保三年先生五十三歳の夏四月大阪に遊び、五月彦根に小野田舜卿を訪ふなど、意氣頗る壯であつたが、六月十二日俄に咯血したので、小石樬園を聘して、その肺血病であることを聞き、爾來斷然飮酒・喫煙を廢し、服藥加療を怠らず、傍ら日本政記の完成に努力したが、二十六七の兩日また咯血し、翌七月二十五日には大に咯血した。先生旣に諦觀して死生を度外に置き、咯血の歎を作つて、血色正赤且つ熱あるを誇つてゐる。また病を問ふ者があると燭を剪つて豪談する程であつた。先生の尊皇愛國者であることは、この病中にも發露されて面白い。小石樬園は年來の知人でもあり、醫として手腕も信用を置いてゐたが、蘭法醫であるといふ理由で、漢法醫の福井棣園を主治醫に代へた。そのことを備中の小野泉藏への書簡に、

「小子も六月十二日より發症咳血也。如二痰塊之血一五六日ほど出、漸々に收り、十五六日目又一度、七月二十五日に大發、吐二赤沫一候、肺血に決候とて、棠醫大に懼れ申候。其後は先收居候。小石氏など蘭方にて色々細工療治いたし候故、斷然漢方に轉、王道にて生死は置二度外一候也」

と八月十四日付で報じてゐる。この頃前記の二醫はいふまでもなく、新宮涼庭・牧百峰等も手を盡して診療の事に當つたが、旣に膏肓に入り不治の境をさまよひ、八月十八日同二十二日・二十三日また咯血し、九月二日から疲勞衰弱加はり、十五日からは兩用もかなはず、二十三日未の刻(午後二時)から危篤

墓所

に陥り、暮六つ時、日本政記の稿を執筆しつゝ、左右を顧みて「暫く假寝しやう」といつて、眼鏡をかけたまゝ筆を傍に措いて、靜に安らかに眠るが如く大往生を遂げた。門人兒玉旗山・牧百峰・宮原節庵の三人葬儀の事に當り、二十五日綾小路通千本西入南側の光林寺で葬儀を行ひ、遺言によつて遺骸を東山長樂寺の後山に埋めた。（前頁寫眞參照）

七 先生の後裔

先生は初妻淳子との間に聿庵(餘一)があり、その子孫現存して賴宗家を承け、廣島に家を有し、後室梨枝子との間に擧けた三男一女の中、長子辰藏は早世し、二男支峯(又二郎)儒を業として先生の家を繼いだが、現存久一郎氏はその女系である。三男鴨涯(三木八)は安政大獄のために殉じて後を失つたが、明治になつて家を立てた。

御園淳子
＝聿庵餘一――誠軒東三郎――古梅彌次郎―┬成一（現東京高等學校漢文科教授）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└循二
山陽久太郎
＝
小石梨枝子
―┬辰藏　夭
　├支峯又二郎――もと柏村氏 庫山龍三―┬久一郎
　│　　　　　　　　　　　　　　　　└八郎
　├鴨涯三木八（のちの三樹三郎）……八郎（龍三の子）
　└女子　殤

琴瑟相和す

八　先生の逸話

文化十二年先生が小石梨枝子を迎へられると、その新婦の貞淑温良を愛し、觀花賞月、芝居を見るにも祭典に行くにも、必ずその妻を携へ、途上睦じく相語るを樂とした。されば一時それが京洛中の評判となつて、人に揶揄せられたこともあつたが、先生少しも意に介せず、却て駱駝（夫婦同伴のこと）を人にも勸めた程である。卽ち友人小島彫山に送つた書狀にも「尚々どうぞ御出可レ被レ成候。用捨（遠慮）は山陽にはスカタンなり。駝他出難レ成候はば駱ばかり奉レ待候。今月もらひもの大分有レ之、內にて皆食ひてしまふも無益なり。御夫婦連にて御出可レ被レ成、かゝも共義くれ〴〵申居候」とある。されば京の家に居て筆を揮ふ時は、梨枝子必ず傍に在つて墨を磨り紙を展べ、疲れた時にはその肩を揉んだ程で、かの文政元年の九州旅行の際、博多で次の詩を作つた。「客蹤輿に乘るも輙ち盤桓たり、筺裡の春衣酒暈斑たり、遙かに憶ふ香閨燈下の夢、吾に先んじて飛び過ぐ振鰭山」と。その家を思ひ妻を想ふの深いことがよく窺はれる。

先生の傲岸不屈

文政四年の秋、日野大納言資愛は使を先生の許に遣り、親しく相語りたいと言はせた。然るに先生は固辭して應じない。資愛も亦根氣よく使を出した。その四度目の時、先生もその熱心に動かされ、使者に對して「先日より度々の御使、御苦勞に存ずる。拙者如きをそれ程までに御懇望下さる段は辱けないが、參殿仕るについては拙者の望がある。第一拙者は田舍者、上下を着けて膝

行するなどの事はでき申さぬ。第二には行儀を正し、足の痺れを耐へ、欠伸・咳拂を忍ぶことなどはでき申さぬ。衣服もこのまゝ、御酒下さる時、家來扱ひなされぬなら、參殿仕らう。また酒は伊丹の劍菱、ほろりと苦味があつて、咽喉を抉るやうでなければ飲み申さぬ。下物は琵琶湖で取つた鮮魚でないと食ひ申さぬ。これ等を御承知ならば參殿仕らう」といつた。資愛これを聞いて「愈々以て面白い男ではある。如何にも望み通りにするから、早々招いて來い」と命じ、準備を整へて待つた。先生は黑木綿の布子に、雙瓶子の紋付羽織を着、長刀を横たへ、二升入の瓢を書生に持たせて日野家に行つた。資愛親ら出迎へ、厚く待遇して下にも置かず、翌日更に使を遣つて昨日の訪問を謝し、禮にとて金一封を贈つたが、公家風に「金千疋 賴久太郎殿へ 日野家」と書し、日野家の三字を太く大きくし、賴久太郎殿への六字を細く小さく而も左の方に低く書いてあつたので、先生それを投げ返して受取らない。使者が歸つてこの事を告げると、資愛直にその包紙を改め、宛名を高く大きく賴先生と記し、我が名を低く小さく日野資愛再拜と書し、深く非禮を謝して贈つたので、先生氣を直して受け納められ、爾來親交の間柄となつた。

白河樂翁と風流の交り

文政二年四月二十八日、松平定信の臣田内主稅が先生の宅を訪れた時、談たま〳〵杜鵑の事に及んだが、そこに居合はせた母梅颸が「私はまだ杜鵑の聲を聞いたことがない」といつたのを、主稅が江戸に歸つて定信に話すと、定信は谷文晁に命じて月に血を吐く杜鵑の畫を描かせ、自ら贊を入れ、主稅に持たせて先生に贈らせた。文政五年二月十五日この畫が先生の手に届くと、先生は直にそれを廣島に送つた。母はそれを見て大に喜び、歌一首を詠んで先生に送り返し、先生も亦杜鵑行の詩一篇を作り、母の歌と共に畫に添へて定信に返還して好意を謝した。

清暉樓の滑稽劇

文政六年八月十六日の夜、田能村竹田が鴨川畔を歩いてゐると、一旗亭の樓上から、一藝妓が連りに彼れの名を呼ぶので、怪みながら入つて見ると、流に臨んだ室には、たゞ杯盤狼藉たえて男氣なく、花と見まがふ藝妓が並んで

ゐるので、竹田茫然として立つてゐると、老妓の一人が「天下誰人か君を識らざる」と美しい聲で吟じ出した。竹田益々呆氣に取られてゐると、隣室から「天下誰人か君を識らざる」と異口同音に吟じて現はれ出たのが先生・浦上春琴・雙林寺の月峯などで、竹田を加へて杯を傾け、遂に素人芝居を催すことに決し、月峰の斡旋で小道具を集め、藝妓を見物人としていざ幕をあけやうとする所で、町奉行支配目付に差止められ、席を三本木の清輝樓に移し、密にそれを行つて終夜大騒をしたといふ。

畫家岸駒をへこます

文政十一年の頃岸駒も京都にゐて畫名を轟かし「山陽の書岸駒の畫は天下の雙璧」といふ語が行はれた。先生岸駒が心驕り、傍若無人の振舞あると聞いて、面憎く思ひ、三條の骨董屋佐兵衛に案内させ、岸駒の家を訪れて「一氣呵成の靈筆を頂きたい」とて素絹を出した。岸駒も亦山陽が己れを輕侮してゐることを知つてゐたから「折角の御所望なれど、拙者は潤筆料が至つて高い。この絹であると五十金以下では筆を染め申さぬ」といつて、先づ先生の膽を奪はうとした。先生は「拙者もさもあらうかと存じ持參致した。是非御揮毫下さい」といひつゝ、懐中から金子を出した。案に相違した岸駒は今更斷る筋もなく、得意の猛虎一嘯の畫を作つた。先生厚く謝辭を述べて携へ歸り、平生愛顧の力士、鶴の音を招き「これは岸駒の畫いた虎である。化粧廻しに仕立てゝ、土俵入りをせよ」と、仕立料まで添へて與へたので、鶴の音はその言の如くに仕立てゝ土俵入りをした。京の人々は岸駒の落款ある化粧廻しを見て驚いて、その非見識を嗤つた。岸駒慚恨に堪へず、佐兵衛を介して先生に書を賴み、先生の言ふがまゝに、百金を出した。やがて佐兵衛が先生の書を携へ行くと、岸駒は「御苦勞であつた。これを藝妓の腰巻にして敵を討つてやらう」といひながら、披いて見ると「天照皇大神　賴久太郎襄謹書」とあつたので、さすがの岸駒またもしてやられたと切齒して口惜しがつた。先生は岸駒から得た百金で、花は櫻の彌生中頃、うかれる蝶にそゝのかされて、華頂山門の櫻を觀、歌妓を招いて大に興を催したといふ。

九　名　著

先生の著作は頗る多く、日本外史・日本政記の二大名著を始め、『山陽詩鈔』『山陽遺稿』『小文規則』『古文典刑』『新策』『通議』『日本樂府』『謝選拾遺』等數十部に達するが、先生の見識と本意を見るべきものは、日本外史と日本政記である。

日本外史

日本外史は先生二十三歳の享和二年に一先づ脱稿して母に呈し、更に稿を改めて叙事體とし、文化五年二十九歳で一段落を告げたが、なほ推敲を重ねたいと考へて、たやすく人に示さず、ただ大窪詩佛にだけ草稿二十卷を送つて批正を求めた。その後平塚飄齋大鹽中齋から『大日本史贊藪』や『讀史餘論』などを借覽して、この書の論贊を作り、文政の中頃にはほゞ完成したものらしい。

松平定信日本外史を徵す

松平定信は文政九年四月に致仕して、江戸の築地に閑居し、風月を樂み讀書著作を事とするやうになつたが、その京都留守居役不破右門から日本外史の完成を聽き、文政十年三月公然使を以て先生に日本外史の提供を望み、その五月先生から樂翁侯に獻ぜられた。樂翁その謝禮として自著の『集古十種』と白銀二十枚を贈つた。かくて本書の寫本は漸く世に行はれたが、先生の存命中には刊行せられないで、天保十五年八月武藏國川越の城主松平大和守齊典によつて、始めて上木公刊され、芝神明町の書店泉屋から發賣したので、讀者は潮の寄せるが如く之を求め、一瀉千里の勢で六十餘州に傳播した。

日本外史の特色

本書が世に歡迎された理由は(1)立意論評の妥當穩健なること、(2)體裁の整ひ且つ美しいこと、(3)文章の遒勁巧妙であること、(4)先生の學風が訓詁注疏を棄てゝ實用を重んじたこと、(5)尊皇愛國の熱誠を以て著はされたこと、(6)時代の要求に投じたことなどで、今や世界の名著の隨一と賞贊され、英・露・獨・米などの諸國語に飜譯された。

日本外史著作の目的

先生がこの書を成した素志は啻に武家政治時代の史實を編するばかりであつたかも知れないが、後人から見ると、その平生の尊皇斥覇の主張を實現しようとの宿念がこめられてゐたに相

違ないと思はれる。先生の最期の天保三年九月九日京都の儒猪飼敬所は伊勢に赴く前に、告別のために先生を訪ねてその病を問うた。その時談偶々南北朝正閏の事に及び、敬所は先生に對ひ「君は物の筋目を正し本末を明かにして、頻に南正北閏を說くが、今日の天子は北朝の御血統ではないか、餘りに南朝正統を主張しては今の皇室に對し奉つて不敬であらう」といふと、先生昂然として「これは驚き入つたことで、先生の言とも覺えぬ。なる程一時は南北兩朝に分れ、朝廷は二ヶ所に在つたが、その後合一され、南朝が親、北朝が子といふ約束を固めて、三種の神器の授受も相濟んだ。南朝あつての北朝であり、北朝あつての南朝であるから兩朝合一の後は南北の別はない。今の天皇は神武天皇の後裔にまし／＼、申すまでもなく正統の天子である。若し足利氏の擁立した北朝を正統とするならば、楠公新田氏等を以て亂臣賊子となすか。」と熱し來つては眥裂け眉軒り慷慨激越病軀とは思はれない程であつた。さればかの正統論を作つて、日本政記の後に置いた。これ等を考へると先

生の日本外史は單なる武家敘事史ではなく、暗に尊皇斥覇の意を寓するものと觀られる。

日本政記は父春水が嘗て企てて果さなかつたその遺志を繼ぎ、先生が二十九歲の頃から、諸種の材料を蒐集し、研究思索を重ね、殊に文政十年に日本外史の改刪を了へてからは、專ら力をその著作に注ぎ、天保三年不治の難症を知つてからは、病を努めてその執筆を續け、正親町天皇の永祿年間まで書き續けて遂に倒れた。よつて門人關藤藤陰が元龜以降を書き繼ぎ、これを豊田天功に托して校正せしめ、終に完成したもので、神武天皇から後陽成天皇までの史實を編年體に記述し、間々史論を挾んだものである。後人を感奮興起せしめ、維新鴻業の根柢となつた點に於ては、遙に日本外史に及ばないが、史籍としての價値は相當に大なるものがあるから、先生の二名著とするも決して不當ではない。

十　餘榮

先生存生の間は、その氣骨の稜々たると、青年時代の放逸に累せられて、反對者も相當に多く、輕侮・嘲笑・冷罵・誹謗などを受けたが、一たび棺を蓋ふと、崇敬の知己翕然として先生の一身に集まり、追悼の詩文を寄せた名士頗る多く、篠崎小竹・小石樫園・江馬細香(女子)・梁川星巖・雲華大含・古賀穀堂・大窪詩佛・齋藤拙堂・橋本竹下・大槻磐溪・三宅均・鷹羽世宣の如きはその重なるものである。

幕末維新の際に先生に私淑して尊皇愛國の精神を鼓舞されたものが幾人あつたらうか、恐らくこれは夥しい數に上らう。

明治十四年四月二十四日洛東迎賓館で先生の五十年祭を執行するに先だち、朝廷からは三月二十一日特に祭粢料として金百圓を下賜せられ、有り難い御沙汰書をも賜はつた。

同二十四年先生の六十年祭に當る時、聖恩枯骨に及び、十二月二十七日生前の功勞を追念あらせられ、特に正四位を贈らせられたから、翌二十五年三月京都で、同六月廣島で贈位奉告祭を行つた。

先生十一ヶ年間起居の邸地である水西莊の山紫水明處は今や史蹟に指定せられて、偉人の芳躅を千載の後に傳へることとなつた。

今茲昭和六年仲秋の候先生一百年紀念の盛典を京都・廣島の兩地に擧げ、先生の詳傳を敍し、遺墨遺著を蒐集編纂して、益々その功業を追慕し、世道人心を鼓舞するの資に供せんとしてゐる。

賴山陽先生略年譜

誕　生　安永九年（孝格天皇の御代二四四〇年）十二月二十七日、大阪江戸堀北通一丁目濱側に生る。久太郎（ひさたろう）と稱す。

二　歳　天明元年　父春水廣島藩儒員となる。

三　歳　天明二年　廣島の西研屋町の家に入る。

四　歳　天明三年　父春水江戸詰となつたから、外祖父飯岡義齋宅にて生育。

六　歳　天明五年　母に天體の運動について質問す。

八　歳　天明七年　金子樂山に句讀（くとう）を承く。

九　歳　天明八年　正月藩の學問所に入る。武術をも兼ね修む。

十一歳　寛政二年　八月袋町杉木小路の官宅に移る。

十二歳　寛政三年　「立志論」を作る。

十四歳　同　五年　正月「十有三春秋……」の詩を作る。

十七歳　同　八年　正月元服す。

十八歳　同　九年　江戸に遊學し、尾藤二洲の宅に寄寓す。

十九歳　同　十年　廣島に歸る。

二十歳　同十一年　御園淳子を娶る。

二十一歳　同十二年　九月京都に上り福井新九郎方に寓す。

二十二歳　享和元年二月　長男餘一（のち聿庵（いつあん）と號す）生る。この頃から日本外史を起稿す。

二十六歳　文化二年　父春水を助けるため藩の助敎たることを許された。

二十七歳　同　三年　『古文典刑』成る。

三十歳　同　六年　菅茶山の塾に往きその都講となる。

三十二歳　同八年八月　茶山塾を去つて京都の新町通丸太町上る處に私塾を開いた。

三十三歳　同　九年　九月車屋町通御池上る西側に轉居。

三十六歳　同十二年秋　小石梨枝子と結婚す。兩替町通二條下る東側に轉居す。

三十七歳　同十三年二月　父春水を亡ふ。これから三年の喪に服す。

三十九歳　文政元年　父の三周忌を嚴修し、三月から九州に向け大旅行の途に上る。

四十　歳　同二年二月　廣島に歸着。母を奉じて京都に歸る。四月下旬母を廣島に送り屆く。

四十二歳　同　四年春　木屋町に轉居。

四十三歳　同五年二月　松平樂翁から谷文晁筆の『杜鵑圖』を贈らる。十一月東三本木に移り、水西莊と名づく。

四十五歳　同　七年　三月から十月まで母を奉じて諸名所を巡覽す。

四十六歳　同八年五月　三木八（のちの三樹三郎）生る。十月廣島に歸省。

四十七歳　同九年十二月　『日本外史』の改刪全く成る。

四十八歳　同十年三月　母及び叔父杏坪を奉じて吉野に遊ぶ。五月二十一日松平樂翁に『日本外史』を呈す。八月菅茶山を弔す。

四十九歳　同十一年　山紫水明處を新築す。『日本政記』起草。十一月『日本樂府』成る。

五　十　歳　同十二年　春から秋に亘り、母を奉じてあらゆる近畿の名所を歷覽す。

五十一歳　天保元年　夏廣島に歸省。

五十二歳　同　二年　秋また歸省。

五十三歳　同　三年　六月中旬咯血。下旬また大咯血。七月八月また咯血。九月二十三日『日本政記』を執筆しつゝ逝去。二十五日葬儀。東山長樂寺後山に埋葬。

天保十二年　山陽遺稿出版。

同　十四年　十二月九日母梅颸女史八十四歳で逝去。

安政　二　年　九月十七日梨枝子夫人五十九歳で逝去。

安政　六　年　十月七日鴨涯三樹三郎江戸で殉節。三十五歳。

明治十四年　五十年祭、三月二十一日祭粢料として金百圓御下賜。

同二十四年　六十年祭、十二月二十七日特旨を以て正四位を追贈せらる。

昭和　六　年　百年祭。賴山陽先生遺蹟顯彰會成り、三府及び廣島に於て何れも盛大なる祭祀や顯彰事業が行はれる。

九月二十三日　特旨を以て從三位を追贈せらる。

賴山陽先生傳　終

附錄

癸丑歳偶作

十有三春秋　逝者已如水　天地無始終　人生有生死　安得類古人　千載列青史

訓 十有三春秋、逝くもの已に水の如し。天地始終なく、人生生死あり。いづくんぞ古人に類して千載青史に列するを得ん。

解 癸丑歳は寛政五年で先生十四歳の時である。「我が十三年の月日は水の流れるやうに早く過ぎ去つた。天地は無窮であるけれども、人間には生死の壽命がある。何とかして古の偉人にあやかつて、永久我が名の殘るやうになりたい。」と奮發心を興された詩である。

謁楠河州墳有作

東海大魚奮鬣尾　蹴起黒波汚黻扆　隱島風雲重慘毒　六十餘州總鬼魍　誰將雙手排妖氛　身當百萬哮闞群　揮戈擬回

虞淵日　執戟同斸即墨雲　關西自有男子在　東向寧爲降將
軍　旋乾轉坤答値遇　洒掃輦道迎鑾輅　論功睢陽最有力
謾稱李郭安天步　出將入相位未班　前狼後虎事復艱　獻策
帝閽不得達　決志軍務豈生還　且餘兒輩繼微志　全家血肉
殲王事　非有南柯存舊根　偏安北闕向何地　攝山透迤海水
碧　吾來下馬兵庫驛　想見訣兒呼弟來戰此　刀折矢盡臣事
畢　北向再拜天日陰　七生人間滅此賊　碧血痕化五百歳
茫々春蕪長大麥　君不見君臣相圖骨肉相呑　九葉十三世何
所存　何如忠臣孝子萃一門　萬世之下一片石　留無數英雄
之涙痕

東海大魚 聖德太子 訓　東海の大魚鬣尾を奮ひ、黒波を蹴起して黼扆を汚す、隱島の風雲重ねて慘毒、六
十餘州すべて鬼魅。誰か隻手を將つて妖氣を排し、身は當らむ百萬哮闞の群戈
を揮つて回さんと擬す虞淵の日。戟をとつて同くきる即墨の雲。關西自ら男子
の在るあり、東向なんぞ降將軍とならん。乾をかへし坤を轉じて値遇に答へ、輦
道を洒掃して鑾輅を迎ふ。功を論ずれば睢陽最も力あり、謾りに稱す李郭天步
を安んずと。出でては將入りては相位未だ班せず、前狼後虎事また艱む。策を帝
闕に獻じて達するを得ず、志を軍務に決す豈生還せんや。且く兒輩を餘して微
志を繼ぎ、全家の血肉王事につくさしむ。南柯の舊根を存する有るにあらずん
ば、北闕を偏安して何れの地にか向はん。攝山透迤として海水碧なり。吾れ來り
て馬を下る兵庫の驛、想見る兒に訣れ弟を呼び來つて此に戰ふを、刀折れ矢盡
きて臣が事畢んぬ。北向して再拜すれば天日陰し。七たび人間に生れて此の賊
を滅ぼさん。碧血痕は化す五百歳、茫々たる春蕪大麥長ず。君見ずや君臣相圖り
骨肉相呑み、九葉十三世何の存する所ぞ。何ぞ如かん忠臣孝子一門に萃まり、萬
世の下一片の石、無數英雄の涙痕を留むるに。

讖文中の語。北條高時を指す

即墨雲 齊の田單即墨城を守るとき牛をとつて士卒と同じく勞に服せり。楠公の忠動を指す

睢陽 唐の張巡睢陽城を死守す。楠公を指す

關西男子 周の韋孝寬曰く孝寬は關西男子なり決して降將軍とならずと

李郭　李光弼郭子儀共に唐の臣。新田足利二氏を指す

解　楠木正成の湊川の墓に參拜して作つた。北條高時が大軍を以て後醍醐天皇を笠置に攻め、遂に祖先義時のしたと同じ樣に天皇を隱岐の島に遷し奉り、日本國中强い者がちの世となつた。この時誰が片腕でもつてこの良くない空氣を排ひのけ、賊の大軍を一手に引受けて天皇のために勤王したか。それは關西の男子卽ち楠公で、天地をくつがへす程の戰略で天皇の御信任に酬い、首尾よく北條高時を討滅し、御還幸の御道を淨めて、鳳輦を兵庫にお迎へした。元弘の功を論ずれば正成が第一であるが、足利尊氏らが如何にも功があつたと誇り、將相に對する恩賞が不公平であつたから、建武の中興は忽ちに敗れ、やつと高時が亡びたと思ふばかりで、尊氏の謀叛となつてまた難事が起つた。尊氏直義兄弟が九州から東上する時、天皇に奏して一旦叡山に行幸をと願つた正成は、その請の聽き屆けられないのに不平をも起さず、この度こそは戰死と決心し、櫻井驛で遺訓して子正行を河內に往なした。吾れ山陽が攝津のうね〳〵と續いた山を見送り大阪灣の靑い海を迎へてこの兵庫の驛に來て、馬を下りて當年を想ひ見るに、公は弟正季と共にこゝに奮戰し、武運全く盡き臣下としての義務をも果したから、愈々最後の御暇乞をと、北向して天皇のまします方を再拜すれば、思ひなしにか日影もくらい。七度人間に生れて來て、この逆賊を滅ほさねば措かぬと誓つて、兄弟さし違へて討死した。その天晴な碧血の痕には今來て見ると春の雜草が茂りその間に大麥が伸びてゐる。北條氏といひ足利氏といひ君臣互に陰謀を以て陷れあひ、兄弟一族相攻めた結果は、北條氏が九代足利氏が十三代續いたといつても、今は何が殘つてゐる。楠公のやうに忠臣孝子一門にあつまつて、萬年の後までも『嗚呼忠臣楠子之墓』とある一片の石碑に、幾百千人とも知れぬ日本男兒の感淚を灑がせる方が大にましであらう。すべきものは尊皇忠勤である。」

題不識庵撃機山圖

鞭聲肅々夜過河　曉見千兵擁大牙　遺恨十年磨一劍　流星

光底逸長蛇

訓 鞭聲肅々夜河を過る、曉に見る千兵の大牙を擁するを、遺恨なり十年一劍を磨し、流星光底長蛇を逸す。

解 不識菴は上杉謙信のこと、機山は武田信玄のこと、謙信が只一騎で川中島の附近の信玄の陣へ斬り込んだ圖に賛した詩である。「謙信が馬に跨り鞭の音も靜々と夜中に千曲川を渡つて、夜の明け方に敵陣へ着いて見ると、信玄は部下の兵の中に居て今日の軍の采配を振つてゐる。こゝぞと長年の間待ちまうけた一刀、振り揚げて太刀風荒く斬りつけたが、思ひどほりには行かなくて、その劍光の閃く下で信玄を逃したことは如何にも殘念である」と謙信の身になつて詠んだものである。

楠公別子圖

海甸陰風草木腥　史編特筆姓名馨
一腔熱血存餘瀝　分與兒曹灑賊庭

訓 海甸の陰風草木なまぐさし。史編特筆して姓名かんばし。一腔の熱血餘瀝を存し、兒曹に分與して賊庭に灑がしむ。

解 楠公父子櫻井驛の訣別の圖に題した賛である。「海邊のこの處は延元元年五月足利尊氏が九州から大軍を以て東上し激戰をした所である故に風は陰慘で草木までもなまぐさい。さはあれ楠公父子訣別の事は史書に特筆されて、その芳名が千載の下に傳はつてゐる。何のために正行を河内に歸したかといふと、己は今度の戰に討死と覺悟したが、その胸中にある忠君の熱血の滴を正行らに遺して後年逆賊追討のために勤王させようとの所存である。」

泊天草洋

雲耶山耶呉耶越　水天髣髴青一髪
萬里泊舟天草洋　烟橫篷窓日漸沒
瞥見大魚波間跳　太白當船明似月

訓　雲か山か呉か越か、水天髣髴青一髮、萬里舟を泊す天草洋、烟は篷窓に横たはつて日漸く沒す、瞥見す大魚の波間に跳るを、太白は船に當つて明月に似たり。

解　文政元年八月二十七日先生が島原半島の千々岩から船出して、天草灘を横ぎつて大矢野島に着かれ、その地の儒者瀧江龍淵の家で書かれた詩で、この日の夕方近く舟中で作られたものである。「舟中から西を望むと雲か山か但しは南支那の呉か越か見定めがつかない。水と空とは相似て居て唯だ青い一線が見えるだけである。今日遙々と舟で來てこの天草灘に泊らうとする。夕餉の支度をする煙が篷で掩ふた窓にたなびき日が段々落ちて行く。名の知れない大魚が波間に跳るのがちらと見えたが、顏をあげると太白(宵の明星)が船へきらめいて月程に明るい」といふので、北條霞亭は西遊第一の詩とほめ、菊池五山も絕唱と讃歎してゐる。

前兵兒謠

衣至骭袖至腕　腰間秋水鐵可斷　人觸斬人馬觸斬馬　十八結交健兒社　北客能來何以酬　彈丸硝藥是膳羞　客若不屬饜　好以寶刀加渠頭

訓　衣は骭に至り袖腕に至る。腰間の秋水鐵斷つべし。人觸るれば人を斬り馬ふるれば馬をきる。十八交を結ぶ健兒の社、北客能く來らば何を以てか酬いん、彈丸硝藥これ膳羞、客若し屬饜せずんば、好するに寶刀を以てして渠が頭に加へん。

解　關原の戰後頃から新納武藏守忠元の發意によつて、薩摩では十歲以上の少年青年の自治的教育團體ができた。それを兵兒組といつた。當時島津氏は豐臣秀賴を擁護し、隨つて石田三成に黨したから、肥後の加藤淸正(德川家康の味方)から攻めて來るかも知れないので、それに備へるため、新納忠元は城砦を堅固にする工事を始め「肥後の加藤が來たならば、煙硝さかなに團子會酌、だごは何だご鉛だご、それでも聽かいで來るならば、首に刀の引出物」といふ歌を作つて、土工の役夫に謠はせた。先生この歌を文政元年九月鹿兒島で聞いて譯したのである。「衣服の丈は脛かぎり袖の行は腕かぎりで、質素な身なりであるが、腰に帶

んでる日本刀は鐵をも斷ちきる鋭さである。だから敵人が來ればその敵を斬り、馬がさはればその馬を斬つてしまふ。さやうな勇ましい健兒の團體が十八社ある。肥後人がやつて來たら鐵砲玉と火藥で御馳走してやらう。それでお客が飽き足らないといふなら、その時は引出物としてこの寶刀をやつらの首にさしつけてやらう。」

後兵兒謠

蕉衫如雪不愛塵　長袖緩帶學都人　怪來健兒語言好　一操南音官長嗔　蜂黃落蝶粉褪　倡優巧鐵劍鈍　以馬換妾髀生肉　眉斧解剖壯士腹

訓　蕉衫雪の如く塵を愛せず、長袖緩帶都人を學ぶ、怪み來る健兒の語言好きを、一たび南音を操らば官長嗔る。蜂黃は落ち蝶粉は褪せぬ。倡優巧に鐵劍鈍れり、馬を以て妾に換へ髀肉を生じ、眉斧解剖す壯士の腹。

解　山陽先生が鹿兒島に來て見ると、昔の薩摩隼人の意氣はどこへやら、全然反對に懦弱に見えたものだから、この後兵兒謠を作つて前のと對照した。「薩摩健兒の今の樣は芭蕉布の帷子を着て大切さうにしてゐる。長い袖に緩い帶ですつかり京都風を見習つた。だから不思議な程詞が都めいて來た。うつかり薩摩の地詞でもいはうものなら上役に叱られさうだ。蜂の體についてた黃ろいものも蝶の羽にあつた粉も落ちてしまつた。（青年が飛んだ方に力を入れて意氣が銷沈したとの形容である。）芝居の眞似なんか上手になつたが、武士の魂は鈍つてしまひ、馬を賣つて妾を買つて暮すものだから、股ずれがなくて髀が肥つて來た。美人の目の力それは鋭い刄物で薩摩壯士の腹が自由自在に斬りさいなまれる。（何と墮落したことではないか。）

下筑後河過菊地正觀公戰處感而有作

文政之元十一月　吾下筑水僦舟筏　水流如箭萬雷吼　過之

使人竪毛髮 居民何記正平際 行客長思己亥歲 當時國賊
擅鴟張 七道望風助豺狼 勤王諸將前後殁 西陲僅存臣武
光 遺詔哀痛猶在耳 擁護龍種同生死 大擧來犯彼何人
誓剪滅之報天子 河亂軍聲代銜枚 刀戟相摩八千師 馬傷
冑破氣益奮 斬敵取冑奪馬騎 被箭如蝟目眥裂 六萬賊軍
終挫折 歸來河水笑洗刀 血迸奔湍噴紅雪 四世全節誰儔
侶 九國逡巡征西府 棣蕚未肯向北風 殉國劍傳自乃父
嘗郤明使壯本朝 豈與恭獻同日語 丈夫要貴知順逆 少貳
大友何狗鼠 河流滔々去不還 遙望肥嶺嚮南雲 千歲姦黨
骨亦朽 獨有苦節傳芳芬 聊弔鬼雄歌長句 猶覺河聲激餘
怒

訓解 正觀公は菊池武光、戰處は大保原である。文政の元(年)十一月、吾筑水を下るに舟筏を僦へり。水流箭の如く萬雷吼ゆ。これを過ぎれば人をして毛髮をたてしむ。居民何ぞ記(憶)せん正平の際を、行客長に思ふ己亥の歲(正平十四年)當時國賊(足利義詮)鴟張を擅にし、七道(畿内以外の全國)風を望んで豺狼を助け、勤王の諸將前後に殁して、西陲僅に存す臣武光、遺詔(後醍醐天皇の)哀痛なほ耳に在り、龍種(懷良親王)を擁護して生死を同じくす。大擧して來り犯す彼れ何人ぞ(少貳賴尚を指す)誓つてこれを剪滅して天子(後村上天皇)に報いん、河は軍聲を亂して枚を銜む(枚は馬の嘶く聲を留める板)に代ふ。刀戟相摩す八千の師、馬傷き冑破れて氣益ゝ奮ひ、敵を斬り冑を取り馬を奪ひて騎る。箭を被むること蝟の如く目眥裂く、六萬の賊軍終に挫折す。歸來河水に笑つて刀を洗へば(福岡縣陸軍飛行隊の營所太刀洗の名はこゝから起つた。)血は奔湍に迸りて紅雪を噴く。四世の全節(武時・武重・武光・武政の忠勤)誰か儔侶せん。九國逡巡す征西府、棣蕚未だあへて北風に向はず(兄弟和睦して官軍に盡すこと)、殉國の劍は乃父より傳ふ。

征西府 懷良親王征西將軍たり

嘗て明使を卻けて本朝を壯にす。豈恭獻(明から贈つた足利義滿への尊號。義滿明の封册を受け屈辱に甘んじた。)と日を同うして語らんや。丈夫の要は順逆を知るを貴ぶ、少貳大友何の狗鼠ぞ。河流滔々として去つて還らず、遙かに望む肥嶺(肥後の山々)の南雲に嚮ふを、千歲の(後には)姦黨骨も亦朽ち、獨り苦節の芳芬を傳ふるあるのみ。聊か鬼雄(菊池一族のすぐれた勇者)を弔ひて長句を歌へば、猶ほ覺ゆ河聲の餘怒に激するを(讀を附けたら意味はほゞ自ら判らうと思ふから、難語だけを解釋して、全詩の解を省いた。)

蒙古來

筑海颶氣連天黑　蔽海而來者何賊　蒙古來　自北來　東西次第期呑食　嚇得趙家老寡婦　持此來擬男兒國　相模太郎膽如甕　防海將士人各力　蒙古來　吾不怖　吾怖關東令如山　直前斫賊不許顧　倒吾檣　登虜艦　擒虜將　吾軍喊　可恨東風一驅附大濤　不使羶血盡膏日本刀

男兒國 日本の古名磤馭盧島を男兒(をのこ)國の義に用ひたり

訓解 筑海の颶氣天に連なつて黑し。海を蔽うて來る者は何の賊ぞ。蒙古來る、北より來る。東西次第に呑食を期し。趙家(宋の皇室)の老寡婦(皇太后楊氏)を嚇し得て、これを持つて來り擬す男兒の國(日本國に)。相模太郎(執權北條時宗)膽甕の如く、防海の將士人各々力む。蒙古來るも、吾怖れず。吾怖る關東の令山の如きを(鎌倉幕府の軍令が山の如く嚴重であることを恐れる)。直に前んで賊を斫り顧ることを許さず。吾が檣を倒し、虜艦(賊船)に登り、虜將を擒にし(我が勇士河野道有の奮戰力鬪を指してゐる。)吾軍喊す。恨むべし東風一驅大濤に附し、羶血をして盡く日本刀に膏しめざるを。(大風か吹いて敵艦をやつつけたので、思ふさま日本刀で彼奴等を斬つて斬つて斬りまくる餘地がなかつたのは殘念である。)

余到藝留數旬、將歸京寓、遂奉母偕行、作侍輿歌

與行吾亦行　與止吾亦止　與中道上語不輟　歷指某山與某

水。有時俯理襪結解　母呼兒前兒曰唯　山陽一路十往還
省鄉每計瞬息裡　二毛侍輿敢言勞　山驛水程皆鄉里　於兒
熟路母生路　雙眸常嚮母所視

訓　輿行けば吾も亦行き、輿止まれば吾も亦止まる。輿中道上語輙ます歴指す某山と某水と、時あつては俯して理む襪の結解。母兒を呼ぶ前兒唯といふ。山陽一路十往還鄉を省して每に計る瞬息の裡。二毛輿に侍する敢て勞を言はんや、山驛水程皆鄉里、兒に於ては熟路たり母には生路。雙眸常に嚮ふ母の視る所。

解　文政二年先生四十歲の時、二月四日九州の大旅行から廣島に歸り、二十日ばかり逗留して、二十三日に始めて母を奉じて京都の寓居に向つた。その道中の有樣を歌つたものである。「母の乘つてゐる駕籠が進めば自分もついて進む。駕籠が止れば自分も休む。輿中の母と徒步の自分と引切りなしに話續け、あれは何山あれは何川と一々母に案內をする。時としては母の足袋の紐を結んだりまた解いたりする。また母が久太郎と呼ばれる前に、自分は呼ばれたかと思つて唯といつて返事することなどもある。山陽道の一本筋の路は、自分はもはや十往復もしてゐるから、歸省にもさほど日數がかかるとは思はない。だから今年四十になつて黑毛と白髮と交つた初老ではあるが、母の駕籠について步いて苦しいとはいはない。山の際の驛場も、海岸の道も、今は自分の鄉里同樣に馴れて來た。自分に於てはかやうに馴れた路だが、母に取つては初めての道中だから、母は何を珍しがつて見てゐられるか、その方へ氣を配ることである」と詠んだ。孝子山陽の姿が目に浮んで瞼が熱くなるではないか。

新居

新居逢元日　推戶晴曦明　階下淺水流　涓々已春聲　臨流
洗我研　研紫映山青　地僻少賀客　自喜省送迎　棲息有如
此　足以愜素情　所恨唯一母　迎養志未成　安得共此酒

慈顔一笑傾、磨墨作郷書、醉字易縱横

訓 新居に元日に逢ひ、戸を推せば晴曦明かなり、階下に淺水流れ、消々として已に春聲。流に臨んで我が研を洗へば、硯紫山青に映ず。地僻にして賀客少く、自ら送迎を省くを喜ぶ。棲息かくの如きあれば、以て素情にかなふに足る。恨む所は唯一母、迎養志未だ成らず。いづくんかこの酒を共にし、慈顔一咲して傾くるを得ん。墨を磨して郷書を作るに、醉字縱横なり易し。

解 文政五年十一月九日先生東三本木の水西莊に移り、翌六年元日この新居で春を迎へて、作られた詩である。毎年の事ながら先生は除夜・元日の作には必ず父母の事を懷つて詠んでゐる。孝子山陽の面目はこゝにも窺はれる。單なる作詩と文章だけの偉人ではない。「水西莊の新しい住居で元日に逢つて、窓戸を明けたら朝日がきら〳〵と光り、階下には鴨川の淺い水が流れて、そのちよろ〳〵する中に春の聲がほの見えてゐる。元旦の試筆をするとてその水で硯を洗へば、硯の色と紫の山の色の青さとが映り合ふ。こゝは邊鄙で年賀の客も少いから、自然客の送迎が省けて樂だ。こんな棲心地であれば、平生から考へてゐた理想の住宅に近い。殘念なのは父春水は亡くなつてゐられるから勿論だが、二親分の孝養をしたいと思ふ母上を迎へて、奉養する餘裕がないことで、何とかして母と一緒にこの年酒をくみかはし、母がにつこりとして杯を傾けられる姿が見たい。何はともあれ母への年賀狀をと、墨をすつて元旦試筆の手始に書いて見ると、屠蘇の加減で文字がしどろもどろになりがちである。」とまぎらはしてはゐるが、母を思ふ情に胸も塞がつて、思ふやうにうまく書けないといふことを暗示してゐる。

楠氏論

外史氏曰、余數往來攝播、閒訪所謂櫻井驛者、得之山崎路、一小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋經足利織豐數氏、世故變移、道里驛程、從輒改耳。余於是低回不能去。顧望金剛山、嶷立雲際、想見公擧義

之秋、及其子孫據以扞護王室也。觀公詣行在對天子、曰「臣而未死、賊不患不滅」夫以一兵衛尉、而居然以天下之重自任。豈非感激値遇、以身許國哉。故能以赤手障江河、回天日於既墜、何其壯也。公聚北條氏精鋭於一城之下、而使新田足利之屬、擣其空虛、以殪其渠魁。帝之復辟、疇爵任職、宜以公爲首。而纔能與結城名和輩比肩。其失於擧措、足以知中興之無成矣。及足利氏叛、朝廷方倚新田氏爲重、公特充編裨、供其驅使、亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷、殆致掃殄者、非因公之策耶。嚮使帝以其所任新田氏者、以任於公乎、曷至使犬羊狐鼠之賊、蹂踐吾朝廷哉。然觀其臨死戒子又曰「吾死、天下悉歸足利氏」夫知天下之不可爲、而猶留其子孫、以衞天子。其設心雖古大臣何以遠過。故子孫能守其遺訓、護正統天子於彈丸黒子之地、以防四海寇賊者、及三朝五十餘年之久、擧一門之肝腦、而竭諸國家之難、至其澌盡灰滅、而後足利氏始得大成其志於天下。蓋朝廷不能大任楠氏。而楠氏所以自任、莫以加焉。世之論中興諸將、尚視其資望大小、而不深撰其實。又與當時之見等耳。不有楠氏、雖有三器、將安託焉、以繫四方望哉。笠置夢兆、於是益驗。而南風不競、俱傷共亡、終古莫以恤其勞。悲夫。抑正閏雖殊、卒歸於一、能煕鴻號於無窮、使公有知、亦可以瞑矣。而其大節巍然、與山河並存、足以維持世道人心於萬古之下。比之姦雄迭起、僅傳數百年者、其得失果何如哉。

訓解　日本外史第五卷楠氏の卷末にある論贊である。外史氏(山陽先生のこと)曰く、余數〻攝播の間を往來して、いはゆる櫻井驛なる者を訪ひ、これを山崎路(山

崎街道)に得たり。一小村耳。過ぐる者或は其の驛址たるを省ず。蓋足利織豐(織田・豐臣)數氏を經、世故變移し、道里驛程從つて輒ち改まりしのみ。余是に於て低回(行きつ戻りつ)去る能はず。金剛山の雲際に嶷立するを(聳え立つを)顧望し、公の義を擧ぐるの秋及び其の子孫の據つて以て王室を扞護(逆徒を防いで皇室を守り奉ること)するを想見するなり。公の行在(笠置山の)に詣り天子(後醍醐天皇)に對ふるを觀るに、曰く「臣にして未だ死せずんば、賊の滅びざるを患へざれ」と。夫れ一兵衛尉(楠木正成の官)を以て、而も居然(しつかりと構へて)として天下の重きを以て自ら任ずる、豈値遇(天皇の御めがねにかなひ信任せられること)に感激し、身を以て國に許せるにあらざらんや。故に能く赤手(素手)を以て江河(楊子江と黄河、支那本部の二大河である。天下滔々として賊軍にくみする大勢はこの二大河の奔流して低きにつくが如しとの譬喩)を障へ、天日を既墜に回す(隱岐に奉遷せしめられた天皇を京都へ囘へし奉る)何ぞ其れ壯なるや。公北條氏の精鋭を一城(千早城)の下に聚めて、新田足利の屬をしてその空虛を擣き(留守になつてゐた鎌倉に打入り)以て其の渠魁(親玉卽ち北條高時)を殪さしむ。帝の復辟するや(一旦京都を落ちさせられた後醍醐天皇が皇位に復せられると)爵を醻い職に任ずる宜しく公を以て首となすべし。(元弘の亂の論功行賞は是非とも楠公を以て第一等とすべきである。)而るに纔に能く結城(宗廣)名和(長年)の輩と肩を比せしむ。其の擧措を失ふこと(恩賞の處置の不公平なことで)以て中興の成すなきを知るに足る矣(矣字は意味を強めるための文字で訓まない字である。)足利氏の叛するに及び、朝廷方に新田氏に倚りて重しとなす。(尊氏が謀叛すると、朝廷では義貞を力と賴まれた。)公特に褊裨に充てられ其の驅使に供せらる。(正成は義貞の副の大將格とせられ、義貞の指揮に從はしめられた。)(それといふのも)亦其の門地の若ざるあるを以て焉爾。然れども京師大捷し、殆ど掃殄(尊氏の軍を京都郊外の糺の河原で打破り、その勢を大部分京都から追攘ふ)する者、公の策に因るに非ず耶。嚮に帝をして其の新田氏に任ずる所の者を以て、以て(それで)公に任ぜしめんか、曷ぞ犬羊狐鼠の賊をして吾が朝廷を蹂踐

(ふみちらす・ふみにぢる)せしむるに至らんや。然るに其の死に臨み子を戒むるを觀るに(櫻井驛で子正行を教訓する詞を見ると)又曰く「吾れ死せば天下は悉く足利氏に歸せん」と。夫れ天下の爲すべからざるを知つて、而も猶其の子孫を留め、以て天子を衞らしむ。其の心を設くること古大臣といへども何を以て遠く過ぎん。故に子孫能く其の遺訓を守り、正統の天子(吉野朝廷の天皇)を彈丸黑子の地(鐵砲玉や黑子の大きさ程の狹い領地)に護り、以て四海の寇賊を防ぐ者、三朝(後醍醐・後村上・後龜山の三天皇の御代、今は長慶天皇を加へて御四代)五十餘年の久しきに及び、一門の肝腦(楠木氏一門の血や肉やこと〲く)を舉けて、諸を國家の難に竭して、その澌盡灰滅(氷の解け盡きたり、物が火に燒けて灰になつて滅する如く、楠氏一門の人々が全くなくなること)に至り、而る後に足利氏始めて大に其の志を天下に成すを得たり。蓋朝廷大に楠氏に任ずる能はず、而も楠氏の自ら任ずる所以、以て爲に加ふる莫し。世の中興諸將を論ずる、尚其の資望(位地名望)の大小を視て、深く其の實を揆らず。又當時の見(此の時代の門閥などをのみ重んずる間違つた考へ)と等しきのみ。楠氏あらずんば、三器(皇室傳承の三種の神器)ありといへども、將安に託して、以て四方の望を繫がんや。笠置の夢兆(後醍醐天皇の笠置の行宮にまし〱た時、或る日の御夢に、紫宸殿の南の木の下に、天皇の御座が設けられ、二人の童子が來て、泣いて天皇に申し上げた。「今天皇のおはしますべき御座は天下廣しといへども、こゝより外にはござりません。」と。天皇御夢から覺めさせられ、南の木は楠である。畿內に楠といふ武士あるかと判ぜられ、やがて正成を笠置にお召しになつたといふ傳說)是に於てか益〻驗あり。而も南風競はず(吉野は京都に對して南に在る故に、吉野朝廷の御勢威が振はないとの意である。)俱に傷き共に亡び、終古以て其の勢をあはれむことなし。悲いかな。抑〱正閏(吉野の皇室が正統で、京都の朝廷が閏統であること。)殊なりと雖も、卒に一に歸し、能く鴻號(皇位のこと)を無窮に熙む。公をして知るあらしめば、亦以て瞑すべし。(滿足して眼をつむつてよい。)而して其の大節巍然として山河と並び存し、以て世道人心を萬古の下(萬年の後)に維持する

に足る。これを姦雄（わるだくみの巧な人物）迭に起り僅に數百年に傳ふる者に比するに、其の得失果して何如ぞや。（一族悉く忠死し、その勢に酬いられなくとも、芳名を千歳の後に殘し、後世國民の模範となつた方が、やつと二三百年その家を續けるために不義の限を働く姦雄よりも遙に勝つてゐる。）

賴山陽先生傳附錄終

昭和六年九月二十日印刷
昭和六年九月廿五日發行

著作兼發行者　京都府教育會主事　吉村保

印刷者　株式會社似玉堂代表者　福井松之助

印刷所　京都市柳馬場通三條南　株式會社似玉堂

發行所　京都市川端通丸太町上ル　京都府教育會
電話上(3)二三六〇番

373
528

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High		Wide		Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x	22.5cm.	x	1cm.
852(四六倍)	26. ,,	x	18.5 ,,	x	1 ,,
853(菊)	22.5 ,,	x	15. ,,	x	1 ,,
854(四六)	18.5 ,,	x	12.5 ,,	x	1 ,,
855(特)	24. ,,	x	15. ,,	x	1 ,,

other sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA - TOKYO - FUKUOKA

終